「蒼い時」 1980年刊 山口百恵 ◀◀「女の時代」駆けたスターの告白

揺るがぬ意思「自立」示した

人気絶頂の山口百恵が結婚、引退する。衝撃のニュースに沸いた1980年春、節目を飾る本の出版を狙って各社が動いていた。

本人と直接交渉をし、企画を所属事務所と出版社に通したのは駆け出しのプロデューサーだった残間里江子さん(69)だ。自身も30歳を前にキャリアを模索していた時期。70年代は「女の時代」ともてはやされたが「実態は消費の担い手としての期待。その中で女性は常に本当の『自立』とは何か、生き方に右往左往してました」。

だが、時代の先頭を走り、「強い女」のイメージもあったスターは、流れにあらがうように家庭を選んだ。

その生身の本音を引き出すことが、惑う女性へのヒントになるのでは。そう考えた残間さんは、ライターの聞き書きではなく「自分で書かないか」ともちかけた。条件は二つ。うそは書かない。生い立ちや恋愛・性にも向き合う。

新たな人生を前に総括を望んでいた百恵さんは、正面から応えた。「タブー」のない21年間の物語。「当時のアイドルが自ら書くのはあり得ない。でも彼女は納得したことはやり通す強さがあった。だから一人の作家として信頼し、支えることに徹しました」。当時、芸能誌「週刊明星」の副編集長で、残間さんと共に極秘にこの本を担当した山下秀樹・元集英社会長(76)は振り返る。

名前入りの原稿用紙を特注し、執筆に戸惑っていた時期には作家の瀬戸内晴美(寂聴)さんを紹介してもり立てた。超過密スケジュールの中、原稿用紙で約450枚。引退コンサートの約2週間前に出した『蒼い時』は5日ごとに20万部の増刷がかかり、1カ月で百万部を突破した。

蒼い時(集英社文庫)

■本の内容 引退前の約4カ月で書いた自叙伝。それまでの自分の「終決」として、婚外子という出生や父との軋轢(あつれき)、性、結婚、引退への思いなどを率直につづった。単行本では「今、蒼い時…」と題したあとがきが特製原稿用紙15枚の直筆で掲載された。

「あなたのおかげで、女性の地位は十年前に逆戻りしちゃった」。結婚でキャリアを閉じることには、こうした批判もあった。百恵さんは自ら本の中で紹介し、反論する。

女の自立とは何か。「生きている中で、何が大切なのかをよく知っている」ことであり、対象は仕事でも、家庭でも、恋人でも構わない。精神的な自立なのだ――と。

デビューから楽曲を手がけた音楽プロデューサーの酒井政利さん(84)は引退を告げられたとき、驚かなかった。母親を大切に思い「いい結婚をしたい」という強い思いは最初からあったのだという。

どんな曲でも、その曲の主人公を演じる万全の準備をしてレコーディング室に入ってくる完璧主義者だ。「自分をプロデュースする能力が高く、何事も精いっぱいやる。その力を家庭で発揮し、自分を表現している。ぶれない。その道筋は、本人には最初から見えていたのでしょう」

バブル期を経て、産休、育休など子育てをしながら働き続ける仕組みができ、女性の生き方、働き方は多様化した。そうした変化の中でも『蒼い時』は時々に増刷がかかり、新しい読者をひきつけている。文庫本と併せて発行部数は340万部を超す。

なぜ、今も支持されるのか。酒井さんは、その理由に彼女が持つ「揺るがない透明感と、迷いのない決意」を挙げる。「ポスト百恵」として、多くのアイドルが登場した。「むしろ松田聖子や中森明菜ら次世代の新しい生き方の女性たちがいるから、昔ながらの生き方を貫く『山口百恵』が照らされてピカピカと輝くのかもしれません」

今年還暦を迎えた三浦百恵さんは7月、『蒼い時』から39年ぶりに本を出版した。『時間の花束』(日本ヴォーグ社)には家族のため、仲間のため、世の中のため、自身のために刺してきたキルト作品が、思い出とともに紹介されている。息子たちの成長がわかる作品や、笑顔で針を持つ姿もある。20万5千部と、手芸関連本では異例の大ヒットを記録中だ。

その裏表紙に、さりげなく刻まれたひと言がある。

「物語は続いていく。」

時代を経ても、揺るがぬ生き方は変わらない。そう語りかけているようだ。

(権敬淑)

結婚式を終え、記者会見をする三浦友和さんと百恵さん=1980年11月19日、東京都港区

三浦百恵さんの作品集『時間の花束』にも収載されたキルト作品(左)=2015年2月、埼玉県春日部市

■山口百恵引退以降の女性と働き方

1980年	女性の平均初婚年齢25.2歳
3月	山口百恵が結婚と引退を発表
4月	松田聖子がレコードデビュー
9月	『蒼い時』刊行。翌月引退
81年	糸井重里のコピー「いま、どのくらい『女の時代』なのかな。」が話題に
86年	男女雇用機会均等法施行
91年	バリバリ働くキャリアウーマンの略「バリキャリ」が「現代用語の基礎知識」に登場 バブル崩壊で地価下落
92年	育児休業法施行
97年	この年以後、共働き世帯が専業主婦世帯を上回り続ける
2005年	合計特殊出生率が最低の1.26
16年	女性活躍推進法施行 「保育園落ちた日本死ね」が流行語に
18年	女性の平均初婚年齢29.4歳 安室奈美恵引退

(敬称略)

対照的 でもどちらも自分に正直

「松田聖子論」で山口百恵も論じた心理学者 小倉 千加子さん(67)

1970年代、日本の女性は必死で家庭の外へ逃れ、社会に居場所を求めました。その中で山口百恵さんはキャリアを捨て、伝統的な生き方に回帰した。彼女自身「カタギ」の世界で生きたい思いが強く、引退は「苦界を去る」ことだったのかもしれません。

入れ替わりで登場した松田聖子さんはバッシングに遭いながらも仕事、結婚、出産を手に入れていった。対照的ですが、自分の欲求に正直で、それを実現していく「欲張り」という点は同じです。

男女雇用機会均等法を経て、女性たちは「ガラスの天井」にぶちあたりながらも、求める生き方のために壁を壊してきた。学歴、職業、出産も選択肢が増え、かつてよりは自由度が増えたと思います。

じゃあ、幸福になったかといえば、どうでしょうか。

保育園の運営に関わっていますが、働く母親が残業でお迎えに遅れることがよくあります。その間、じりじりしながら子どもを預かる保育士もまた働く母親だったりする。男性の参加はあっても、保育など多くの場面で女同士が時間を奪い合い、消耗しています。

望む、望まないに関わらず、女性も働かないと家庭も国も回らないのが今の日本です。「欲張り」な女性たちは、家庭を守る百恵であり、働く聖子でもある。その大変さに光をあて、もっと手当てをしない限り、自立への消耗戦は続きます。

◇次回は『鉄道員』の予定です。

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.